

夏季福音特別集会 第1回

キリストの賜う「信」と「祈り」

2019年8月23日（京都KKRくに荘）

奥田昌道

キリストの賜う「信」 キリストと無理心中 恵福なるかな靈の貧しき者 神さまのプログラムの中に キリストという切り札 古い上衣よさようなら 「破れだよ破れ、破れっぱなしでいい」我々はいったい何者か 四つの非ず キリストの賜う信望愛祈 復活というより変貌 この9月で私は87歳 祈り

●キリストの賜う「信」

皆さんにお配りしてありますプリントの、2019年京都夏季福音特別集会資料——「祈り」の視点からの「み言葉集」——には、マタイ伝から引用しながら、他のルカやマルコではどうなっているかということを書きました。だいたい、キリストのみ言葉を中心にしながら、やや膨らませた感じで拾いあげてみました。パウロがコリント書簡で、

「いつまでも続くものは信仰、希望、愛である。なかでも最高に素晴らしいのは愛である」

と言う。「信仰、希望、愛」ということを非常に強調します。そういった「信・望・愛」という観点から、この「マタイ伝より」という「み言葉集」を眺めますと、なんと圧倒的に「信」が多いことか。たとえば、

「人の生くるは、神の口より出づる凡ての言に由る」（マタイ4・4）

と。これはやはり神さまの御言にこつちをあずけていく。自分の思いではない。

「御言はこのように語っている。ではその御言に従って行きましょう」

と。よく、

「信仰か、行為か、どっちが大事か」

と言われるけれども、それはおかしい。御言に従って行くことが「信」なんです。御言に従っている姿が「行」でしょ。それを疑わないで御言に自分をゆだねかけて、それに従っていく姿が信そのものであり、それは御言を生きるという意味では行でもあるわけです。ですから、

「信仰か、行為か」

なんて、よく問題にしたりすることがありますけれども、そんなことはおよそ意味を持たないと思います。

いったいこのマタイ伝から並べてあるものは、その「信望愛」のどれに当たるかと思つてやってみると、ぜんぶ「信」なんですね、ほとんどが。それでまた驚いたんです。



「人の生くるは、神の口より出づる凡ての言に由る。それに従って行きなさい。そして、あなたには生命がありますよ、永遠の生命をいただけますよ」

と。御言にゆだねて従って行くという姿。これが「信」ですね。

「主なる汝の神を試むべからず」（マタイ4・7、ルカ4・12）

もちろんそうです。足を滑らして落ちたら怪我しなかった。「それでは、崖から飛び下りてみよう」と。これは全然逆なんです。崖から飛び下りる、それは神さまを試みているんです。「あなたが守ってくれるかどうか、私はやってみます」

というのは、ところが、「あつ、しまった！」と足を滑らせた。いろいろな面でありますよ、我々は日常生活で。そして、なんと守られていた。「ありがとうございます」と。これが信でしょ。それが、

「神を試むべからず」

という言葉になって出てきてますね。それから、その次もそうですよ。

「主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事えまつるべし」（マタイ4・10、ルカ4・8）

あちらこちらいろいろ頼りたいものがあるかもしれん。けれども、

「あなたはあなたの主なる神・キリスト、そのお方にだけ身を委ねていきなさい」

「はい、わかりました」

と。これが我々の生活そのものでしょ。我々の日常生活は、危険いっぱいの中で生きていくんですよ。たとえば、朝目覚めて、

「ああ、よく生きてたなあ」

と。途中で息を吸うのを止めていたら死んでいたかもしれない。

今日、衡平君が来てくれましたが、衡平君は時々、呼吸するのを忘れてしまうんです。お父さん、お母さんはよく気をつけているそうですよ。ですから、皆さん、呼吸をするのは当たり前なんて思われないように。これも恵みなんです。しかも、呼吸というのは、吸というのは吸う方ですよ。呼というのは吐き出す方です。まず自分を吐き出して、空っぽになったところに素晴らしい命が入りこんでくる。出して吸うんです。出すのがいやだということに入ってこれない。それから次の、

「汝ら悔い改めよ、天国は近づきたり」（マタイ4・17、マルコ1・14〜15）

これもそうですね。

「あなた、方向転換しなさいよ。ちょっと、あなたの向かっている方向はお門（かど）違いとちがう？ 自分、自分、自分でやっているんじゃない？ そうじゃないよ。神さまが、キリストさまが、あなたにどんなふうにも、あなたをどうしたいと思っておられるか、あなたに何を願っておられるか、あなたのことをどんなに心配しておられるか、そつちに視点を変更しなさいよ」



と。目のつけどころを、

「自分、自分、自分。私はついてない。私はどうだ。あいつは私のことをボロクソに言う」

とか、そんなものは自分ではなくて、

「神さまは、キリストさまはあなたをどんなふうに見ておられるか」ということです。

「あつ、あいつは素晴らしいやつや」と見てくださっている。

●キリストと無理心中

そうなんですよ。旧い自分は十字架で片づいているんですから。

「われ主と共に十字架せられたり」

と。十字架せられて、生きている人間がおつたら、手をあげてほしい。十字架でキリストだつて死なれたんですよ、一端、十字架で。そしてまた、栄光のお姿で現れてくださった。素晴らしいお姿で現れてきた。我々は十字架に付けられて、なお生きているなんてありえないことです。

自分は死ぬのがいやですから、「私はいやだ、いやだ」と言うのに、キリストが勝手に私を十字架につけて殺してくださいました。殺人犯ではないですか、キリストは。いや、殺人犯ではない。あるいは、

「あいつは死にたがっているな」

と付度そんたくして、一緒に死んだ。そういうのを無理心中という。そうでしょ（笑）。

でも、いや、自分が可愛くて可愛くて、「自分は死にたくない」というのはまだそれはいいですよ。

「もう私なんか生きている価値がない。私は死にたい」

というのが世の中にはいっぱいいるんですよ。それに対して、

「そうじゃない。早まってはダメだ。お前の悩みは全部、私が引き受けた。『すべて労する者、重荷を負う者、われにきたれ。われ汝を休ません』と。来なさい。そうしたら、あなたの荷物は、あなたの苦しみは全部、私が十字架で背負っている。あそこでもうあなたは私と一緒に無理心中をしたんだよ」

と。それなら、死につばなしなのか。とんでもない。

「あなたの命を奪っておいて放っておいたら、私は殺人犯や。お前さんをもつと素晴らしい生命に生き返らせた。生命を与えた。私はお医者さんやんか。今、この地上においてそんなお医者さんはおらへんで」

と。そうでしょ。この世のお医者さんは、せいぜいラザロを甦らせた。あれも素晴らしい



キリストですけれども。やはりラザロは死ぬんです。もとのラザロに返っただけです。けれども、そうじゃなくて、永遠の生命、天の次元、キリストと同じ次元の生命に生かしてくださるのはキリストさまだけなんです。そこへ行こうと思っただけじゃ、旧い人間がいつペン滅ぼされなければいけません。旧い人間というのはエゴイストでしょ。人と比べて、私はついてない。あいつは憎たらしい。あんなやつは死んでしまえばいいのに。あいつは死んだ方がよかった」

とか（笑）、そういう自己中心的なやつ、それがキリストの言われる「罪」なんです。キリストは福音書の中でどう言っておられるか。

「誰でも私について来たいと思うならば、日々、己を捨て、おのが十字架を負って、私について来なさい」

と言われた。つまり、自分なんて煮ても焼いても食えん。そんな自分に拘こたわったらいかん。

「でも、私は死ねないんです。どないしたらようござんすか？」

「はい、喜びなさい。もうあんたを私が殺したから」

「へえ、主さま、あなたは殺人犯？」

「そうだよ、旧いお前を殺して、もつと素晴らしい生命を与えた。だから、殺人犯どころか、あなたに永遠の生命を与えた救い主だよ」

「そうでございませうか。ありがとうございます！」

と。クリスチャンとは、これじゃないですか。これを本当に皆さん、受けとってニンマリしていると、

「あいつ、きみがわるい。何かしらんけれど、ニコニコ、ニコニコしておるんや」

と。そういうのがクリスチャンではないですか。自分にこだわったら絶望です。でも、

「そんな、いやでいやでしょうがないあんたというのは、もう私が先に無理心中で殺してしまっただけや、すまんかったな。だけどな、ひきかえに、あの復活の生命、永遠の生命、死んでも死なない生命、素晴らしい生命を与えたんやで」

「あつ、そうでしたか。それはありがとうございます」

そういうのが、私たちのいたっている福音の世界なんです。そこに目覚めて、

「ありがとうございます、ありがとうございます」

と言って生きているのが、我々じゃないですか。感謝、讚美、祈り。反対は、嘆き、つぶやき、疑い。全然、別世界へ連れて行ってくださったんですよ、キリストは。しかも、人間でね、別世界へ連れて行ってくれる人を私は欲しかったんですよ。私は別にクリスチャンでも何でもなかったから、自分がいやでいやでしょうがない。だから、

「私について来い！」

とひとこと権威をもって言ってくれたら、誰にでも付いて行くつもりだった。私は自分の尊敬するお師匠さんにそういうことを言ったら、



「そんなことが気になるようなら、もうきつきつと学問をやめなさい」と、谷底へ突き落とされた。

「この野郎、こんなおっさんに誰が相談するものか！」

と思ったですよ、私は。それで、放浪の旅をして、キリストに出会った。あの時、その先生が変な親切心で、

「そうか、そうか、かわいそうやな。こんな学問の厳しい世界に連れ込んで、わるかったな」

なんて言っただけで慰めていたら、私はいつまでたっても浮かびあがれなかったかもしれない。結局、お師匠さんは、

「お前さんの悩んでいるものは私の専門領域の外にある。私は学問の師匠だけども、人生の師匠ではない。それはお前自身で探さない」

と言われたのだと思う。それで私はキリストに出会うことができた。あれは私の先生の怪我の功名という（笑）。ご自分が自覚されたかどうかしらんけれども、少なくとも、

「わしはその問題に関しては専門家ではない」

ということをご存知だったんだと思いますね。その先生は、

「学問するときには、無宗教でないといけない」

ときかんに言われた。つまり、宗教という色眼鏡で物事を見たらいかんと言われた。ところが、私はだんだん学者として認められるようになったら、

「奥田君のようながいいんだらうね、ぶれないから」

と、そういうふう言われた。ガラツと見方を変えられたわけですね。

「あんな頼りなくて、何かというと「先生、先生」と言っただけで、私を頼りにしていた

あいつが、突き離れたら、見事に別の意味で一人立ちした」

と、きつとそう思われたと思うんです。

● 恵福なるかな霊の貧しき者

また、「み言葉集」に戻ります。

「我に従い来れ、さらば汝らを人を漁る者となさん」（マタイ4・19、マルコ

1・16、ルカ5・1、11）

お魚取りの専門家であるペテロとかヨハネとかヤコブとか、それは宗教的には真っ白です。だから、キリストの色で染められた。そして、エルサレムのいわば伝統的なユダヤ教の新しい跡取りとされた。他方、異邦人に対してはパウロを選ばれた。しかも、パウロというのは、キリストに逆らっていた、どうしようもない殺人犯みたいな人でしょ、パウロは。そういうパウロをひっくり返して異邦人伝道にお用いになった。そして次の、

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」（マタイ5・3、12、



ルカ6・20～26

これも「信」と言いましようかね。フランシスコ会訳では、これはギリシア語から直接訳したというんですけれども、

「自分の貧しきを知る人は幸いである。天の国はその人のものだからである」という訳が付けてある。小池先生は、

「自分は霊が貧しくなれない。本当に霊が貧しくなったのはキリストだけだ」

と。では、貧しくなれない自分はどうかしたらいのか、ずいぶん苦しんだ。そしたら、

「幸いなるかな、わが十字架によりて、既に霊貧しくされてある小池よ。天国なる我、

聖霊の我、なんじの中にあり」

と響いてきて、畳の上に平伏したと、告白しておられる。

「恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者」というところを、フランシスコ会の方は、

「霊の貧しき、自分は何もないということを知る者が幸いだ。その人はキリストに

宿っていただけだから」

と、そういうふうにごを解していました。どっちもこれは自分が空っぽになる方ですから、

そこに宿ってくる恵みを受けとる。これは信の世界ですね。それから、

「天の父の全まったきが如く、汝らも全かれ」（マタイ5・43～48、ルカ6・27～36）

これはマタイ伝の前の方で、

「汝の敵を憎め、自分の味方は愛しなさい、敵は憎めと、そう言われているけ

れども、私はちがうんだ。迫害する者、自分を呪う者、そういった自分を敵

対視するやつのためにこそ祈ってやれ。それが天の父の御意である。だから、

あなた方は、天の父の全き如く全かれ」

と。愛の完全性です。

「それはちやうど、太陽は善き者にも悪しき者にも昇っている。神さまが恵み

として太陽の恵みを与えておられる。雨を降らしていらつしやる。そのように、

敵か味方かなんていうのではない。一視同仁だ。天の父の愛はあの太陽よう

なものだ。あなた方もそうであれよ。天の父の全きが如く全かれ」

と。トルストイとか、日本の知識人でアララギ派の方だったかな、非常に「山上の垂訓」

なんかひに惹かれたそうなんです。けれども、それを自分の力で実行しようとして行き詰ま

った。亀井勝一郎という人もそうだった。それで親鸞の方へ行った。

小池先生は、

「キリストというのは、できない事をぶつつけてくる。『できません』と言って平

伏したら大丈夫だよ。キリストは『私がさせてやるからね』と、全部それが背後

に隠されてある。それをしっかりと捉つかまえない」

と言われた。キリストは、できっこないことをどんどんぶつけてくる。たとえば、金持ち



の青年がキリストに、

「私は小さい時から全部、モーセの十誡を守ってきました。まだ、足りないんですか」

「うむ、そうだね。あなたは、大金持ちだから、それを全部貧しい者に施して、空っぽになって私に従ってきなさい。そうしたら永遠の生命だよ」

と。彼は悲しそうに立ち去ったと書いてある。大金持ちだったからだ。小池先生というのはそこはズルいですよ——ちよつとわるいけれどもね——逃げ道を用意して、

「あれはなにも金持ちに本当の意味で捨てるとは仰ってない。『できません』と言って平伏したら、それでいいんだよ。『できません』と言えば、そうか気がついたか、良かったよ」

と。そうすると、心から人に、持っているものを施したくなっていく。無理強いされて、嫌だけれど、惜しいけれども

「そうせざるを得ない。なにか自分が豊かにされてしまって、あげたくてあげたくてしようがない」

と。これがクリスチャンではないですか。キリストから永遠の生命をもらってしまったんですよ。そのうえに何を欲しいと言うんですか。キリストと同質のものを頂いたんですよ。溢れるばかりの豊かな恵みを頂いたら、それをおすそわけしないでは困るではないですかね。蔵を建てててしまいこむわけにはいかん。そういうことですよ。

まあそんなことで、キリストの言葉というのは不可能を突きつけておきながら、

「できません」

と言ったら、
「そんなことはわかりきっているよ。わしに従ってきたら、何でもできるようにしてあげるから」

と。そういうことなんです。

「汝らは世の光なり」

「とんでもない、光れません。私は真つ暗です」

「わかっているよ、私がお前の中に宿れば、お前は光るよ。私がお前の中で光るんだから、大丈夫だよ」

と。キリストのどんな難しい言葉も全部、

「できません」

と言って平伏したら、

「私が、できるようにしてあげるから。お前の中に私が入りこんだら、何でもできるよ」



と。これは小池先生が言ってくれたことです。

●神さまのプログラムの中に

それから、

「祈る時、戸を閉じて汝の父に祈れ」（マタイ6・5〜8）

と。今日は「祈り」を今回の特別集会の主題にしました。これは大事なことです。

「主の祈り」（マタイ6・9〜15、ルカ11・1〜13）

これももちろん大事なところですよ。次は、

「己がために財宝を天に積み。汝ら、神と富とに兼ね仕うることを能わず」（マタイ6・19〜24、ルカ12・33〜34、ルカ16・13）

自分のために富をたくさん蓄えなければならんというのは、自分で自分を守らないと生存競争に勝てないと、思っているからです。ところが、神さまの側はちがう。

「それはお前の心配することではない」

と。たとえば、子どもが、

「うちの親は頼りないから、自分で何でも蓄えて、自分で身を守らないといかん」と言ったら、親は悲しいよな。

「あの小さな子どもが親のことを全く信用してくれへん。それはしょうがないな、わしがそんなならしめない生活をしたから、子どもにまで見離された」

と。これは世間の話かもしれないけれど、神さまはそうではない。神さまは無限量です。それでキリストはそれに身をゆだねきつておられる。だから、

「何事も思い煩うな、明日のことを思い煩うな。空の鳥を見よ、何も心配してないだろ。野の花を見てごらん。ソロモンのあの豪華な姿よりも、野の花の方がよっぽど美しいんだよ。まず、神の国と神の義を求めなさい」

と。「神の国と神の義」はキリストご自身です。キリストご自身の中に、神の国も神の義も全部つまっている。ですから、あのマタイ伝の、

「神の国と神の義を求めなさい」

「えらいこっちゃ、神の義とは何や、神の国とはどこにあるんや」

なんて捜さんでも、

「私が神の義であり、神の国だよ。あんたは私と一つになりなさい。そしたら、すべて必要なものは添えて与えられるんだ」

「いや、私みたいな汚れた人間が、尊いあなたなんかになんか近よれません」

「そんなこと言うな。あんたの汚れも全部、私が十字架できれいに片づけた。あなたは潔い。大丈夫だ」

「あつ、そうでございましたか。ありがとうございました」



と。皆さん、「ありがとうございます」の他に何かあるんですか、神さまに向かう時に。「ありがとうございます」でした。本当に感謝です。気づかない私は申し訳ないです」と。そうしか言えないのではありませか。

自然界を見たつて、お天道さんは、昔から地球上のあらゆる人たちを、生物、万物を太陽は生かし続けてきたんでしょ。今も輝いていますよ。空気だつてそうでしょ。お水もそうですね——なんかこの頃は水も買わないといけない時代になりましたけれども、昔は水を買うなんて考えてもみなかったものですよ、昭和の始めぐらいいまで。多分、戦後でしようね、水を買わなければならなくなったのは——そんなふうには、我々の自然的な生物体としての人間ですら、昔から生かされて生きてきた。地水火風という四大の、天然の恵みによって人は生かされてきた。それを忘れて、文明が進みすぎて、自然を破壊するような、汚すような時代になつてしまつて、まことに申し訳ないことです。

すべては、神・キリストの側で用意してくださつていたんです。そして、我々は神さまに近づけないような汚れた罪深い人間で、その罪深さすらもキリストは十字架で片づけてくださった。もう二重にありがたいことなんです。だから、そのことにはたと気づけば、

「ありがとうございます」

という言葉以外に出てこないんです。そうじゃありませんか？ 皆さん。何もかもが備えられている。

赤ちゃんが生まれる時に、何もかもが備えられているんですつてね。産湯、きれいなお湯と衣とその他すべてのものが備えられて、お母さんがうんうんと唸つている時に、あらゆるものを用意して、「あつ産まりました。よかつたね」といつて、そして産湯をつかつて、温かい衣を着せて、お母さんのところへ連れてきて、「はい、お子さまですよ」なんてね、そういうのが我々自然の姿でしょ。神さまの方はもつと素晴らしいご計画と愛をもつて、すべてを我々のために備えてくださるんです。そういうことにやはり帰り行かなければいけません。すべては神さまのプログラムの中に組み込まれていたということなんです。

●キリストという切り札

私は、そのことを書いてくれているのはエペソ書だと思う。エペソ書一章3節から、

「³讚むべきかな、¹我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて

この「由りて」というのは、由来の「由」という字が書いてある。これは非常に意味が深い。単なる「これこれに依りて」という手段を表すような依存の「依」という字があるでしょ。あれだつたら狭い。「由り」というのは、由来を表したり、非常に豊かな内容だと思えます。キリストの故に、あるいはキリストのお蔭をもつて、そのお方において、

霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、⁴御前にて潔く暇なから



しめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に選び、

天地創造の前から私たちのことはちゃんと神さまのご創造のご計画の中にちゃんと組み込まれていた。それが時満ちて、順次現実化して行った。現れてきた。そして、最後は黙示録の方へ行きますね。そういう壮大な神さまの天地創造のご計画の中に我々はちゃんとプログラムとして組み込まれていた。それが今、現実化して、今このようにして生かしめられている。しかも、我々が生きるにあたっては、キリストという切り札を送りこんで、私たちの一切のマイナスを全部この方において帳消しにして、ご計画通りの素晴らしい霊的存在者にしてくださっている。こういうふうには私はここを読むんです。

⁵ 御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。

このエペソ書を以下読みますと、「我ら」と「汝ら」というのを分けている。エペソの人たちに対しては「汝ら」と言い、パウロの側は「我ら」とあつて区別しているけれども、これは私はちよつと違うと思います。そんな区別は要らん。一緒です。

「二つのものを一つにし」

と、エペソ書は言っている書簡ですから、そんな区別は要らん。だから、パウロが「我ら」といつてくれたら、私たち日本人も全部そこに入っている。ユダヤ人もギリシア人も、そんな区別もない。みんな一緒だと。そう受けとつてほしい。

⁵ 御意のままにイエス・キリストの故をもつて、愛をもつてご自分の子どもとするように、我々を神の子とされるように、もうそういうようにプログラムで出来上がっていた。⁶ 是その愛しみ給う者によりて

というのはキリストさまでしようね。

我らに賜いたる恩恵の栄光に誉れあらん為なり。

キリストを通していろんなことが成就していく。それが神さまにとつてはお喜びであり、栄光である。

⁷ 我らは彼にありて恩恵の富に随い、

我らはこのキリストというお方のゆえに、その中で——「恩恵の富」は、これをひっくり返して、「溢れるばかりの恩恵」ということ。「富」というのは溢れるばかりにたくさんある姿でしょ——溢れるばかりの恩恵に従つて、あの十字架の血潮のお蔭をもつて、罪の赦しをもう既に得ましたと。

その血に頼りて贖罪、すなわち罪の赦を得たり。⁸ 神は我らに諸般の知恵と聡明とを与えてその恩恵を充しめ、

しかもそればかりではない。さまざまの知恵と聡明とを与えた。しばしばパウロは言う、

「単に、救われました、めでたしめでたし、ではない。あなたの霊がもつとたくさんの知恵をいただいで賢くなつて、そして神の国の民としてあなた方は働かなく



てはならない。そのためには知恵もいる、力もいる。必要なものは全部添えて与えられるから」

と、そういうことをパウロはさかんに言います。

9 御意の奥義を御意のままに示し給えり。10 即ち時満ちて経綸にしたがい、天に在るもの地にあるものを、悉とくキリストに在りて一つに帰せしめ給う。

天地一如にしてください。それもキリストのゆえに。キリストが対立物を全部一つにしてくださる。天と地、ギリシア人とユダヤ人、ユダヤ人と異邦人、そういった対立的なものを全部一つに結び合わせてくださる。

これ自ら定め給いし所なり。11 我らは、凡ての事を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業とせられたり。12 これ夙くよりキリストに希望を置きし我らが、神の栄光の誉れとならん為なり。13 汝等もキリストに在りて、真の言すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。14 これは我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉れあらん為なり。」(エペソ1:3-14)

あなた方はもう、救いの福音を聴いて、約束の聖霊をいただいているはずだ。この聖霊をいただくということ、この聖霊こそが御国を受けとるといふ、はつきりした神さまの側からの保証なんだと。

●古い上衣よさようなら

よく、お寺廻りとか、いろんな神社仏跡をまわったら、ハンコをくれるそうですね。スタンプをもらって、何十何か所めぐってきましたとか。我々はそんなハンコではない。ここで聖霊というハンコをポンと押しもらう。インドの方は額に何か赤いのを塗ったりなっていますね。パウロは背中に焼き印されている。ガラテヤ書の最後に書いてます。

「もういろんなことで私を煩わせないでくれ。私はキリストから焼き印を背中にいただいているから。ごめん」

と言って、パウロは絶縁宣言をしている。

「私たちもここに聖霊というもので焼き印、ハンコをもらっているから、これが天国へ行く保証になっているよ」

と。そういうことを言っているわけですね。

エペソ書2章の後半部へ行きましても、今までは対立関係があった。割礼と無割礼とか、イスラエルと非イスラエルとか、そういったいろんな対立があったけれども、それを全部律法すらも葬り去って、二つのものを一つとしてくださった。2章15節に、

「¹⁵ 彼は我らの平和にして、己が肉により、様々の誠命の規より成る律法を廢



して、二つのものを一つとなし、**怨なる隔の中籬を毀ち給えり。**これは二つのものを己に於て一つの新しき人に造りて平和をなし、

と。地上は今も対立が絶えません。近しいと思っていた国もこの頃ちよつと何か絶縁宣言みたいなことが報道されますし。とかく、いろいろこの世はややこしい。けれども、キリストは、神さまの側は、そんな地上での対立を全部、キリストにおいて撤廃して、本当に一つにしてくださいっている。二つのものを一つとなし、**怨という中籬**——**怨みがあるから分裂、分離が起こっている**——そんなものをぶっ壊して、二つのものをキリストに於て一つの新しき人に造り変えた。そして平和をくださった。

16 十字架によりて怨を滅し、

皆さんも人間関係でいろいろ怨みつらみが湧いてくることもあるでしょう。そういうときに、それに囚われないで、

「私はもう既に十字架で**古い人間は死んだ**。怨みつらみをいなく旧い我は十字架で死んだんや。キリストは新しい、キリストのお姿の新しい私をプロデュース(産出)してくださった、クリエイト(創造)してくださった。新創造物とされたんだ」

と。だから、「古い上衣よきようなら」と、「青い山脈」の歌がありましたね。そういう、「**誰でもキリストにあるならば新しく創られたるなり。旧きは過ぎ去った。見よ、一切は新しくなりたり**」

と、コリント書にもありました。ローマ書8章でもそうです。

「誰でもキリストにあるならば新しく創られた者である。生命の御霊の法がある。あなたを**古い律法**というものから解き放つてしまった」

とあります。だから、キリストの中に抱きとつてもらおうということとは、すべてそういった古かった我々のいわば「肉」からぬけ出ている。「肉」というのはヒューマンネイチャー、生まれながらの人間性なんです。生まれながらの人間性は生物体ですから、自己保存本能がある。自己保存本能を捨てたら、みんな死んでしまう。そうでしょ。でも、

「死にたくない、死にたくない」

とっている自己保存本能を貫いたら、喧嘩になって、どうにもならん。そういうものを全部、キリストは片づけてくれた。そして、新創造者としての、新しい人を我々に賜った。これが天国へ受け継いで行くんです。

肉から出たものは土に還ります。ナチュラル(自然的)なものは土に還ります。けれども、ナチュラルな我々の中に、非ナチュラルな、というのは神的なもの、聖なるもの、天の次元のもの、それをキリストが植え付けてくださった。それがこの我々の中に育ってきているんです、見えないけれども。

「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続く」

と、パウロは言いました。見えるものは肉体ですね、こういったナチュラルな自然的なも



のは見えるもので、これは一時的なんです。それが土に還った時に忽然として現れてくるのは、今まで見えていなかった神の次元、霊の次元、それが新しい生命です。それが天に引き上げられていく。これが福音なんですよ。

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たなり」

とコリント書で言ってます。だから、お年寄りの方こそその特権をふりまわしている。

「あんたは、私を見て、しわくぢやなお婆さんと思ってるやろ。見えるところではないよ。見えないものが見えてないんですか。バカね」

なんて。

「このくそ婆は憎たらしいことを言うなあ。でもひよつとしたら、本当かもしれない。聖書を開いたら、あれ、あの婆ちゃんが言ったのはみな聖書の言葉やった。

あんな婆にそんな素晴らしいことが言えるはずがないと私は思ってたんや。すみ

ません、お婆ちゃん」

なんて。そういう楽しいお婆ちゃん、お爺ちゃんに——私はまだ憎たらしいかもしらんけど——でも、本当に楽しいお爺ちゃん、お婆ちゃんがいたら、孫が喜びますよ。喜んでくれる孫にはお年玉でも何でもやりたくなるね（笑）。我々は常に、

「いつも心に太陽を持って」

という、そういうキリストという太陽をいつもキリストはくださる。そういう中に生きていんですよ。

●「破れだよ破れ、破れっぱなしでいい」

祈りは、山の上に行くのが一番いい。僕らは、あの大学紛争でややこしいときも、毎朝、聖書と讃美歌を持って若王子の山の上に行って、そこで大声出して祈った。大声出して祈りますとね、もの凄くスカッとする。そして、あの山から下りる時には脱兎のごとく、牛若丸みたいに跳んではねて、あの哲学の道から丸太町まで競争、若い青年たちと駆けっこですよ。そんなことをやっていた。昭和44年（1969年）の大学紛争のあの頃ですよ。50年前ではないですか。だから、鍛えあげている。あの頃はそのぐらいのことをやってなかったら、大学紛争の中でやっていけなかった。相手はゲバ棒を振り回しているやつですよ。そういうご連中を相手にして一歩も引かんというだけの精神的な力強さがほしかった。それには山に行かなければしょうがない。早朝、山へ行ったら、本当に大声出して祈る。したら、山中で描いていた大野さんという水墨画の絵描きさんが、

「あなた方は若いのに、毎朝熱心に感心ですなあ」

と言って、喜んでくださった。そんなこともありました。

だから、皆さんね、鬱憤があったら山へ行きましょう、若王子山へ。そしてそこで大声出して、「ウワーッ」とやる。腸の底から、何でもいいですよ、言いたいことは全部言った



らしい。

「主さま、聴いてください！」

と。詩篇の祈りはそんな祈りでしょ。

「汝らの心を注ぎだせ」

と。詩篇の59篇とか60篇とか、あのへんに出てきますよね。やはり、突き抜けないと。破れていかないと。

小池先生が私にひとこと言われた言葉で、非常に心に残っているのは、

「奥田君、破れだよ、破れ。破れつばなしでいいんだよ」

と。つまり、

「京都はおとなしくて、なかなか破れてないね」

ということだったんでしょね。それは、京都は上品でしたから。東京のような、そんな……ではないですから。こっちは紳士然とされていますからね。

「奥田君、破れだよ、破れ」

「わかった、よっしゃ」

と。まあそんな気持ちで、若王子山へ行つて、「ウワーツ」とやる。あれをやったら、破れたような気になるんですよ。

「もの言わぬは腹ふくるるなり」

なんて、『徒然草』にあるけれども、やはり自分の中に溜め込んだらいかん。吐き出してしま。何でも出してしま。そして、新しいものをいただく。きれいごとでは行かんです。

赤ちゃんおさなは、幼児おさなは、あるがママをぶつつけている。地べたにひっくり返つて、「ウワーツ」と騒いでいるでしょ。あんなのを、あんだ、大人ができますか。そんなのできっこないよね。でも、キリストは、

「おさなの如くならずば」

と言われる。なにも「道端にひっくり返つて泣き叫べ」とは言つてらっしゃらないけれども、要するに、

「繕つくろうな。あるがママをぶつつける。そしたら、キリストがそれを引き受けてくだ

さるから」

と。まあそんなことだと思っんです。

●我々はいったい何者か

予定して書いてきたことを簡単に申し上げます。一つは、

「我々はいったい何者か？」

ということ。何者か」というのは、日本におけるクリスチャン、しかも我々はいわゆるカトリック教会とか、プロテスタントの有力教団、教派とか、そういった組織を何も持



たない、雑草集団なんですね、言うならば。雑草集団である我々が、こうやって特別集會をやつて気炎をあげています。犬の遠吠えではないんですよ。

「吠えさせるものが来ているから吠えているんだ」

と、そういう自負心、自覺を持つてもらいたい。これがまず、私は、第一に皆さんに訴えたかったことなんです。私は、

「聖書を生きたる、キリストを生きたる」

を今年のタイトルにしました。ヨーロッパでは「聖書を生きたる、キリストを生きたる」は、

「それは当たり前だね」

と言われる。少なくとも、

「あ、失われていたものを取り戻そう」

と。かつてルターが叫んだ、宗教改革をやつてきた。それが今になって薄れているから、

「また元へ戻ろう」

となる。これはヨーロッパではやりやすい。日本は何もないですよ、そういうものが。そうでしょ。その中で、しかも我々みたいな雑草集団が——数から言つたつて大したことはない——それがここで何を叫ぼうとしているか、何を訴えようとしているか。まずそこから始まる。それにはやはり、一人ひとりが大事なんです。集団ではない。各人がキリスト直結、自立、自分の足で立つ、そういう信仰、ゆるぎないものを有つ。それが「聖書を生きたる、キリストを生きたる」ということの中味だと思ふ。

タンポポというの、あれはどんな岩の隙間でも種をおろして、そこから花咲くんです。けれども、タンポポも自分が命のある間は、根が土に縛られています。だから、動けない。ではどうしているか。花になったら、種が風に揺られてどこへでも飛んでいくでしょ。そして着地してまた咲いてくる。あれが私の理想です。

私は肉体を宿しているときは、やはり京都も離れられない。いろんな限界がある。けれども、この肉体が土に還つた時に、忽然と現れてきた靈なる私というのは、キリストと同じ次元になって、どこへでも飛んでいける。そういう姿。しかも、それは皆さんお一人お一人、そういうお一人お一人としてキリストが捕まえてくださっているんです。

「われ既に捉えたりと思わず、キリストわれを捕まえ給えり」

と、ピリピ書で言っています。しかも、パウロというのはキリストに逆らつていた。そういうパウロをひっくり返して、あのように異邦人伝道に遣わしてくださつて、そして、我々はパウロの恩恵をこうむっているわけですよ。そういう我々ですからね。

「いや、東洋は、日本は、キリスト教国ではない」

とか、そういう「でも、ダメなんだ」ということを全部ぶつとばして、

「キリストが、御霊の主が、わがうちに宿り給う。何をか恐れんや」

と。そういう気合を持つてほしいんです。



それは、しかしながら、簡単ではない。非常に狭き門、細き道です。何が狭き門かといいますと、一方では十字架です。十字架というのは、己を否定しないとダメでしょ。自己主張してたらダメでしょ。自分がキリストのようにならぶつ潰れて、

「キリストがすべてです」

というところへ突き抜けないとダメでしょ。これは簡単なようで、なかなか簡単でない。研究とか、聖書の勉強では得られない、そこを突き抜けないとダメですから。「十字架、十字架」といっても、観念的な十字架ではどうにもなりません。本当にパウロとなり、

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり。御霊のキリストが私と一緒に生きてくださったっている。今、肉体にありて生きるのは、私のために私を愛してあの十字架にかかってくださった、そのお方にひたむきにすがりきって生きているんだ」

という、あのガラテヤ書2章20節、これは絶対に忘れないでほしい。

パウロはあのガラテヤ書の始めて、

「人よりにあらず、人によるにもあらず。ただ、キリストによってだけ私は召された」

と言っている。それはそうですよ、キリストに逆らっていた。それをキリストはひっくり返された。アナニヤを通して目が開かれた。そしたら、誰にも相談しないで、自分はダメスコへ行つて、

「そこからもうエルサレムへは上らなかった。十四年後に初めてエルサレムへのぼった」

と言っているわけです。時にはペテロと激しく論争もしています。使徒行伝の15章なんかみたら、激しいですよ。そういう激しさがある。これは福音ゆえの激しさです。妥協しないという。割礼問題ひとつ取っても、パウロは妥協してたら、もつともつと楽だった。ところが、妥協しなかった。しかも、そのパウロは何と言っているか。

「自由を得させるために、キリストはあなた方を解放してくださった。二度と

奴隷の軛に繋がるな」

と言っている。パウロにとって、「奴隷の軛」は律法です。また律法の中のシンボルは割礼なんです。我々日本人にとつては、そんな律法だとか割礼だとか、そんなことはどうもないけれども、我々を今まで縛りつけていた旧きものはいろいろありますね、日本には。

「こつちは方角がわるいからやめておこう」

とか、いろいろありますよね。いろいろな言い伝えもあります。民間信仰もあります。そういう今まで我々を真の自由から妨げてきたものを、全部キリストは十字架で片づけてくださった。



●四つの非ず

私は、キリストへ行く前は、手相見に見てもらっていた。そしたら、

「2週間後にまた来なさい。どのようになあなたが変わっているか見てあげるから」と言う。行くでしょ。するとまた次の指令をくれる。

「どうしなさい」

と。私は、

「私はこのくそオヤジの奴隷なのか」

と思った。そして市川君に言ったら、

「占いは絶対にやめなさい。だいたい、手相見なんて貧相でしょ。手相見で素晴らしい面構えの人はいないでしょ。自分が貧相で、自分で自分の道も開けないやつが、

他人の人生を左右する資格なんかあるんですか」

と、彼はその頃は言いたいことを言っていましたよ。それで僕は、「あつ、なるほど」と思って、ピタッとやめた。聖書では、占いとかは厳しく戒められていますね。霊媒、死んだ人を呼び出して聞くというのも厳しく禁じられています。ですからやはり、ああいう戒めは大事にして、我々は御霊のキリストオンリー、主さまオンリーでゆく。二心ふたごころがあつてはならない。これは皆さんに絶対に守ってほしいと思います。

土台は十字架です。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。復活のキリ

スト、御霊のキリスト、わがためにわがうちに生き給うなり」

と。だから、十字架と聖霊とが一体であるという、これが私たちが賜っているキリスト道なんです。「十字架、十字架」だけでもない。「聖霊、聖霊」だけでもない。「聖霊、聖霊」と言つて、十字架がどこかへ行つてしまっている集団がある。霊的現象を追い求める。奇蹟を追い求める。これは危ないんです。

小池先生の「キリスト告白録」第4巻の『狭き門』というのがある。そこに私は序文を書いています。小池先生が

「四つの非ずあら

という、警戒しなければならぬ四つの要素をあげておられる。これを私は非常に感動をもって「はしがき」に書いてますから、また読んでいただければありがたいと思います。

「四つの非ず」というのは、「霊的傲慢」、「観念」つまり観念信仰、それから「御利益」、そして「パリサイ」。この四つをあげられた。

霊的傲慢、つまり霊的宗教です。

「私が祈ればいろんなことが起こるんだ。君、祈ってほしいかね。うむ、来たまえ。祈つてあげるから。この私が祈つたら全部聴かれる」

と。そういう教祖的な人がいるわけです。キリストに栄光を帰してない。危ないんです。



それから、観念信仰。これは理屈ばかりだと。説明は素晴らしい。けれども、それだけで終わっている。

それから、御利益ごりやく。日本人は御利益信仰に弱いですよ。

「安産の神さまはあつちだから、あつちへ行きなさい。学問の神さまは菅原道真」とか。そういう御利益はダメ。それから、パリサイ。これは他を見下す。ですから、こういう目に見える華はなやかなものではない。それこそ、

「狭き門、細き道、そこを歩め」

と、キリストは言っておられる。

「狭き門より入れ。滅びに至る道は広く、その門は広くて、それに行く者が多い。生命に至る道は細く、その門は狭く、それを見出す者みいは少ない」

と言われました。だから、決して、この世の御利益信仰を求める人に迎合するようなものではないわけです。けれども、

「必要なものはすべて添えて与えられる」

と、ハッキリ約束しておられる。

「まず神の国と神の義を求めよ」

とキリストは言われる。福音というならば、まずイエス・キリストという、これはもう神さまご自身がイエス・キリストの中に充満しているんですから、そのお方が私たちのすべてを成し遂げてくださったんですから、そのお方の中に帰依、帰入、祈りこんでいく。そうすると、必要なものはすべて添えて与えられる。もう自分は十字架でぶつとばされている。もう「自分、自分、自分」なんて絶対に言わない。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず」

と、これを徹底していただきたい。「われ主と共に十字架せられた」んです。自分で十字架で死んだんじゃない。キリストが無理心中して、私をもうすでに葬ってください。葬りっぱなしではない。あのご復活の生命、聖霊という素晴らしい霊と合体して生きる、新しい生命をくださった。新しい生命は絶えず天なるものを求めていく。

それがコロサイ書の3章です。

「あなた方は既に死にたるものにして、あなた方の生命いのちはキリストの中に隠されている。あなた方は既に死んだんだから、上にあるものを求めなさい。当たり前前ではないですか」(コロサイ3:2-3)

と。コロサイ書の3章1節から3節です。

聖書を、のんびんだらりと読むのではなくて、ポイントをつかまえて読む。この習慣を養ってほしい。皆さんなりに聖書の「み言葉集」というものを編集するくらいの気持ちで。たとえば、

「天に生きるものの魂、天に生きるものの姿」



というような表題をつけると、今のコロサイ書が出てきますよ。それから、ガラテヤ書も出てきます。そういった形で、タイトルを立てて、タイトルごとに御言を集めていく。そういうことを、皆さん、ぜひやってください。それは楽しいと思います。

●キリストの賜う「信・望・愛・祈

それから、今回のタイトル、それについてもちよつと触れておきます。

第1回目は、

キリストの賜う「信」と「祈り」

第2回目は、

キリストの賜う「望」と「祈り」

第3回目は祈り会ですから、

キリストの賜う「祈り」

最後の第4回目は、

キリストの賜う「愛」と「祈り」

です。信・望・祈・愛。すべてこれはキリストが賜るもの（たまわ）です。自分の熱心とか、自分の何とかでプロデュースするものではない。全部上から賜るものです。さつきから私は、

「生物体としての生命も、自然の恵みの中で生かされている」

と申しました。太陽然り、空気然り、水もそうだ、大地もそうだ。こういう恵みの中で、悠久の昔から今に至るまで、人は生かされてきた。

「ひと」とは、霊なる人、霊が止まる「霊止」と書く。『大言海』（国語辞書）に書いてあります。

「霊が止まる」と書いて、霊止、「神霊のとどまる存在」というふうに説明してあります。我々は、自然の生物体としては自然の恵みの中で生かされますけれども、霊なる霊止、霊の次元の魂としては、キリストから流れてくる生命、御言、御霊で生かされる。

「聖言 聖霊は わが生命なり」

イエス・キリストの 無者たる僕（召団讃歌A33「主なるキリストは」）

と、小池先生の歌にありますよ。

「人の生きるはパンだけではない。神の御口から出る一つ一つの言葉による」

とありましたね。そういう霊言なんです。ヨハネ伝6章63節に、

「人を生かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語った言は生命であり、

霊である」

という言葉がある。ヨハネ伝は特に「永遠の生命」のことを語っていますが、その永遠の生命とは全部、神さまの霊の次元の生命を語っています。ラザロは確かに生き返りましたよ。でも、元のラザロです。元のラザロでは、永遠の生命はありません。

あのヨハネ伝3章にニコデモとの問答でキリストは仰っています。



「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。神の国に入ることもできない。肉から生まれた者は肉である。霊から生まれた者は霊である。」
ニコデモは本当にとまどって、

「一体どうしてそんなことがありましようか。もう一回、お母さんのおなかの中にいるんですか」

なんて、とぼけたことを言ってますけれども。

あの通りですよ。私たちは肉なるもので播まかれました、生まれました。けれども、霊なるものに甦よみがえる。朽ちるもので播かれ、朽ちないものに甦よみがえる。どこに出てきますか、この言葉は？ コリント前書15章です。聖書の言葉は全部繋つながっていますから、有機体的な一体としてしっかりと把握して、その御言の中に生きる、御言をベースにして生きる、そういうことであってほしい。

●復活というより変貌

このコリント前書15章は復活のことを書いているところです。

「復活なんかありえないと言っているやつがたくさんおる。もし、そうだったら実に我々はさびしいものだ」

と言って、しかもこの15章では、

「おおよそ人間というものは甦よみがえるんだ。だから、キリストも甦よみがえった」

と、そんな言い方までしている。私はこれは違うと思つてます。私は、

「キリストは甦よみがえった。それで私たちも甦よみがえりにあずからしていただく存在になった」

と思つている。それに対してパウロはこのコリント前書15章のとこで、12節から、

「¹²キリストは死人の中より甦よみがえり給たまへりたまと宣のべ伝つたうるに、汝等のうちに、死人の復活なしと云う者のあるは何ぞや。¹³もし死人の復活なくば、キリストも

また甦よみがえり給たまわざりしならん。」

という。私は違うんです。

「キリストが復活されたから、人間も復活できるんだ。キリストの復活なくしては、死人が甦よみがえるなんてことは、私は信じられない」

と、むしろパウロさんにプロテストしたい気持ちでいます。もし、キリストが甦よみがえらなくて、我々が甦よみがえったら、それは何のためか。審判を受けるためです。

「お前は地獄へ行け」

と、それだけの宣言を受けて地獄へ行くだけです。それだったら、甦よみがえらない方がまだましですわ。そうでしょ。まあそんな気持ちでいるんです。

¹⁴もしキリスト甦よみがえり給たまわざりしならば、我らの宣教も空むなしく、汝らの信仰もまた空しからん、¹⁵かつ我らは神の偽証人と認められん。我ら神はキリス



トを甦えらせ給えりと証したればなり。¹⁶もし死人の甦えることなくば、神はキリストを甦えらせ給わざりしならん。

とにかく、復活がなかったら、パウロの伝道なんて一切ナンセンスだと。

¹⁷若しキリスト甦えり給わざりしならば、汝らの信仰は空しく、汝等なお罪に居らん。¹⁸然ればキリストに在りて眠りたる者も亡びしならん。¹⁹我等この世にあり、キリストに頼りて空しき望みを懐くに過ぎずば、我らは凡ての人の中にて最も憫むべき者なり。

もしキリストが甦つてくださらなかったとしたら、あなた方のいだいでいる信仰というのは空虚なもので、あなた方はまだ罪の中で呻吟しているはずだ。もし、そうだとしたら、自分ほど惨めな人間はいない。あれだけの苦難を突破しながらキリストを伝えていくところが、それが全部空虚なことなら、こんなバカバカしいことがあるもんかと、こう言っているわけです。そして20節に、

²⁰然れど正しくキリストは死人の中より甦えり、眠りたる者の初穂となり給えり。

と。ここから凱歌をあげているわけです。最後は、

²⁶最終の敵なる死もまた亡ぼされん。

最後の敵である死をもキリストは滅ぼしたと。そこで凱歌があがっているということをつと書いてます。それからまた次へ行きますと、

「復活といったって、どんなふう復活するのか。復活する生命とはどんな種類のものか」

と。それに対しては、

「自然界を見てごらん。朽ちるもので播かれて、朽ちないものに甦っているではないか」

と、そういうことをいろいろ言うんです。

「人間もそうだ。始めのアダム、朽ちる人間として生み出され、今度はキリストという第二のアダム、死なない永遠の生命である、そういう姿へと変貌させていただくん」

と。私は「復活」という言葉よりも、「変貌」と言いたい。変貌するんです。ちょうど、キリストが山上で祈っておられたら変貌されたでしょ、眩い姿に。あれですよ。死んでいつペン土の中に葬られて、そして何千年も経ってからラツパと共に甦らされるなんていやですよ、そんなものは。

私はもう直ちに向こうへ往きます。今、往っているもの、みんな上へ。私の奥さんも翔ちやんも、あるいは小池先生も、いろんな方々が向こうへ往っていますもの。だから、この世を離れて、向こうの違う次元へ、肉の次元の朽ちる次元から朽ちない次元へと、移るだけ



です。それだけのことなんですね。そのことをパウロのこのコリント前書15章でくどくどと言って、

42 死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、⁴³ 卑しき物にて播かれ、光荣あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、⁴⁴ 血氣の体にて播かれ、靈の体に甦えらせられん。血氣の体ある如く、また靈の体あり。

「血氣の体ある如く、また靈の体あり」と。そうやってキリストは靈の体となって現れてくださったと、そういうことを言います。そして、

50 兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。……⁵² 終のラツパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラツパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。⁵³ 是此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。

血肉は神の国を嗣ぐことはできない。朽ちるものは朽ちぬものを嗣ぐことはできない。ラツパの響きわたる時に、朽ちるものは朽ちぬものに変貌する。我々はそういうように化するんだと。

54 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るときこの朽ちるものが朽ちないものを着——着物のように着る——この死ぬるものが死なないものを着る。そういうふうになった時に、

『死は勝に呑まれたり』と録されたる言は成就すべし。⁵⁵ 『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』

死は生命に飲みこまれてしまったと、そういう高らかなる勝利宣言ができる、ということをごこで言っている。そして、結論として、

58 然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。」（コリント前15・12）

これが大事なんです。「復活だ、復活だ、靈の人間だ」といって、この世を捨てて勝手に向こうへ行くのではない。

「あなた方はこの地上にあつて地味な仕事をしつかりやりなさい。しつかり主にあ

つて果たすべき責任を果たしたら、その時、天に迎えられる。凱旋するんだからね」と、そう言っている。たとえば、パウロはテモテへの手紙の中でそのことを言っています。

テモテへの後の手紙の第4章、

「⁶ 我は今供物として血を灑がんとす、

つまり殉教です。殉教の血を流そうとしている。



わが去るべき時は近づけり。7 われ善き戦闘をたたかい、走るべき道程を果たし、信仰を守れり。8 今よりのち義の冠冕わが為に備われり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜わん、啻に我のみならず、凡てその顕現を慕う者にも賜うべし。」(テモテ後4・6〜8)

こういうものをリアリティとしてしつかり、皆さん、受けとって、日々用意してほしい。これが私の願いです。

思われたる世界ではない。見えないだけです、残念ながら。肉の目では見えてない。けれども、厳然として存在する。朽ちるものの奥に、その先に備えられている朽ちない永遠の世界。これを引つぎ上げてキリストは来てくださった。朽ちない世界から来てくださった。そして自分は朽ち果てて、朽ちない永遠の霊体として甦られた、変貌して現れた。これを「復活」と呼んでいるだけ。そして、みんなをそれに与らせて、一緒に天に昇ってください。これがキリストのなさった素晴らしい御業です。私はその通り受けとっていますから。

●この9月で私は87歳

歳をとるといっなのはつらいですよ、たしかに。今までできたことができなくなりましたよ。肉体的にもいろんな面で。けれども、その栄光の世界がいよいよ近づいているわけです。そこへ近づけられている。

この9月で私は87歳ですから、今まで生きた87年に比べたら、あと仮に100年まで生きたとしても13年しかありませんから、圧倒的に向こうが近いわけです。そこへ光り輝いて昇っていく。聖歌の「恵みの高き峰」(聖歌589)の中に、

「恵みの高き峰 日々わがめあてに

祈りつ歌いつ 我はのぼりゆかん」

とありますね——あれは妻の告別前夜式で歌いました——我々はそうなんです。この地上は修練の場です。この地上でさまざまなことを勉強するんです。キリストがまず勉強してください。3年間ですけれども。伝道に出られる前の20数年間はお父さんお母さんを助けて、本当に長男としてよく働かれた。由木康さんの歌(讚美歌121番)があります。

「馬槽のなかに うぶごえあげ、

木工の家に ひととなりて、

貧しきうれい、 生くるなやみ、

つぶさになめし この人を見よ。」

という、あの素晴らしい讚美歌の通りのことをキリストはなさって、そして僅か3年の伝道、それも敵対する人間が、当時の知識人、学者、宗教家がいっぱいおつて、それで選ばれたのはお魚取りです。そういう漁師を選んで、3年間訓練した。ところが、あのペテロでさえ、

「私は先生と一緒に死にます。こいつらは当てになりませんが、しかし、私に限つ



ては……」

と言ったのに、キリストを、

「知らん、知らん、知らん」

と三度否いなんだでしょ。

「鶏が鳴く前にあなたは二度私を否むよ」

と。その通りになった。それで、

「ペテロはさめざめと泣いた。キリストはそれをじっと見ておられた」

と書いてある。まあ、ああいう場面を本当に読んだら、涙が出ますよね。キリストは十字架の上で、

「彼らをゆるしてやってください」

と、ゆるしをまず祈っておられる。

「彼らは駄々っ子です。わけがわからないまだ子どもなんです。だから、ゆるして

やってください」

と。そんな方がありますかというんだ、私は。あの場面だけを想像しても、私は頭がさがります。「ユダヤ人だ、ヨーロッパ人だ、東洋人だ」と、そんなケチくさいことを言わんでほしい。みんな等しく魂を持った人間なんです。しかもそれはエゴイストであって、神さまよりも自分を大事にする。そういうなかで、イエスという方は神さまオンリー、神さまのことしか眼中になかった方。しかし、その神さまは、

「人を愛せよ。人に生命をわかち与えてやってくれ。苦しんでいる人を助けてやってくれ」

と。だから、キリストは片っ端から人を救いあげていかれたでしょ。あれは御意だからなんです。罪ゆるされた。そのゆるしの代償は全部、キリストが十字架で背負われた。イザヤ書53章にあるとおり、

「彼は我らの咎とがのために打たれ、その打たれし傷によりて我らは癒いよされたり」

と書いてますね。このイザヤ書53章をご自分への預言として受けとって、黙って十字架につかれた。そして、

「彼らをゆるしてやってください。彼らは弁わきまえのない駄だ々だ子に過ぎないのですから」

と、その祈りを祈られた。その事実を思うだけでも、私は頭がさがります。

「キリストをボロクソにしている人は、そこをどういうように読んでいるんだ!？」と聞きたいんです。もうひとつ、

「あなたに生命がありますか?」

と、これも聞きたい。

「あなたに生命がありますか。いつ死んでも、永遠の生命の世界に羽ばたいて行け



る、そういったものをお持ちですか？」
ということと、

「あのキリストのお姿、それをあなたは平然と読み過ごすことができますか？」
と。それで、「平然と読める」と答えるなら、

「そうか、あなたは人でなしだ」

と言いたい。「人でなし」とは「ひと霊止でない」ということ。動物だって、三日ご飯をもらったら——いや、一食でももらったら——犬は忠実なんですよ。なにも忠犬ハチ公だけではないですよ。ところが、人間はそういった恵みをいただいているながら、傲慢にもキリストを蹴飛ばすなら、それはもう自分で自分を地獄へおいやる。それを自業自得というんです。自分の業わざの蒔いた種は自分で刈り取る。

私なんかは、自分で蒔いた種を刈り取ろうとしても、刈り取りようがない。どうにもならないです。それで助けてもらった。キリストが、

「わしが刈り取ってやるから、心配するな。お前のことは全部、私が引き受けた。

大丈夫だ。ひたむきに私にすがってこい」

「はいっ。ありがとうございます」

と。私はそれなんです。非常に単純なんですよ。はい。

まあ、そんなことで、今回すべて、信も望も祈りも愛も全部、キリストが下さる信・望・愛・祈りであるということ。この「み言葉集」を、皆さん、どうぞ自由時間にすっかり味わってみてください。

「わが語りし言葉は霊なり、生命いのちなり。私を食べる。我をくらす、我を飲め」

と、キリストはヨハネ伝で言っておられる。要するに、キリストは、

「私と一つになれ。私とあなたが一つとなったら、とんでもない素晴らしいことになるよ。保証するからね」

と、そういうキリストの絶対的な愛の言葉です。

「神は愛なり」

といえますけれども、その愛というのは十字架の愛なんです。マイナスを全部自分が引きとって、ご自分の中のプラスを無条件でくださる。それを、

「はい、ありがとうございます」

と言って受けとっていくのを「信」という。信というのは自分の信念でも何でもない。キリストがどんなに素晴らしいことをしてくださったか。そのことに気づいたら、もうありがたくて、ありがたくて、

「はい、ありがとうございます。もう、ただ戴きます。赦していただきます」
と。これを人から見たら、

「あの人はペコペコペコペコ、キリストに頭をさげている。ペコペコ屋さんだな」



なんていう。それはもう頭を垂れざるを得ないではないですか。すべてをキリストはしてくださったのだから。そういうふうには、

「救い主キリスト」

といったって、そういうお方なんです。キリストの中にしかない生命、永遠の生命、それをくださる。のみならず、知恵をくださる、力もくださる。必要なものは全部くださる。そういうお方を私たちは頂いたんです。だから、

「ハレルヤ！ 感謝！ 讚美、ごつとうさんです、ありがとうございます！」
と、それで行きましょうよ。

では、最後に私がひとこと祈って、今日は閉じたいと思います。

● 祈り

主さま、ここに参加されたお一人お一人は特別な思いをもって、ここに馳せ参じてくださいました。ご存知なのはあなたご自身でございます。

主さま、私たちは自分の思い、自分の願い、それもありましょうけれども、その前にあなたが何を備え、何を与えようとなさっているか。あなたが何を「ご計画」になっているか。まずあなたの御思いに心を向けることができるように、お一人お一人をお導きください。

主さま、すべては恵みです。マイナスは全部、あなたが引き受けてくださいました。

「生命を受けとれ。お前を生かしたい。われ生くれば汝も生くべければなり」

と。あのヨハネ伝にありますように、あなたはご自分の生命をかけて、私たちを生かし、永遠の存在者として、もはや肉に依存せず、霊なる人として新たに創り変え、導いてくださっていることを感謝いたします。そして、使命を与えてくださいました。小さきキリストとしてくださいました。

あなたが賜った無限無量の生命を限りなく周りの方々に分かち与えていくことができるように、どうぞ、あなたご自身が働いてくださいますように、お願いいたします。

この短い讚美と感謝と祈りを、兄弟姉妹の祈りと共に、聖名にあつて御前にお捧げいたします。アーメン。

